

2025

とうきょう すくわくプログラム

帝京幼稚園では、2025年度もとうきょうすくわくプログラムに参加しています。2025年のテーマは、年少組が“感触遊びと色の発見”、年中・年長組が“運動遊び”を行いました。

年少組の“感触遊びと色の発見”では、「元気のもとは遊びから」という園の方針のもと、子どもたちが「遊び」を通して自然に「気付き」や「学び」を得られるようなテーマを設定しました。

小麦粉粘土やスライム、色水やシャボン玉等、子どもたちが素材に触れながら“こねる”“混ぜる”“伸ばす”など感触を楽しむ時間を十分に設けたことで、色の変化をじっと見つめたり「もちもち」「つるつる」など言葉、表情、動きに豊かに表れていました。



触ると
“ぬるぬる”
しているね!



すごい!
“いろいろな色が
でてきた”よ!

年少組

年中・年長組の“運動遊び”では、体操指導の先生が教えてくれたことをきっかけに、ドッジボールのボールの投げ方やリレーでの走り方、縄跳びの跳び方などどうしたら上手にできるかを考えながら繰り返し取り組む姿が見られました。

年中・年長組



“体操で教えてもらった
投げ方”で
やってみよう!!

もっと
“線の近くを走った方が
良い”んじゃない!?

今年度も、様々な発見をしわくわくしたり、経験を重ね成長していく楽しみを感じられるように活動に取り組んでいきたいと思えます。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

幼稚園・学校番号	1241419
施設名（園名等）	帝京幼稚園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

運動遊び

<テーマの設定理由>

当園では、外部の体操講師による体育カリキュラムを導入し、子どもたちの運動能力の向上を図っている。しかし、全体的に体力が乏しく、疲れやすい傾向が見られ、何事にもすぐに諦めてしまう様子が見受けられる。一方で、外遊びの時間には鉄棒や鬼ごっこ、ドッジボールなどの活動に自ら積極的に取り組み、新しい運動遊びにも興味を示す姿が見られる。こうした子どもたちの興味や意欲を大切にしながら、様々な運動を通して関心を引き出し、目標を設定し達成する経験を積むことで、自信や挑戦する気持ちを育てていきたいと考え、4歳児および5歳児クラスにおいては昨年度に引き続きこのテーマを設定した。

2. 活動スケジュール

4月 共通：徒手運動 5歳児：マット運動
5月 共通：マット運動 鉄棒運動 跳び箱運動 5歳児：陸上運動
6月 共通：ボール運動 跳び箱運動 プール活動 5歳児：マット運動
7月 共通：プール活動
9月 共通：かけっこ・遊戯 4歳児：パラバルーン 5歳児：リレー・組体操
10月 共通：かけっこ・遊戯・短縄運動・鉄棒運動
4歳児：パラバルーン 5歳児：リレー・組体操
11月 共通：鉄棒運動 長縄運動 ボール運動 保育参観
12月 4歳児：短縄運動 5歳児：鉄棒運動 ボール運動 長縄運動
1月 共通：鉄棒運動 マラソン 4歳児：短縄運動 5歳児：長縄運動
2月 共通：ボール運動 短縄運動 長縄運動 マラソン 5歳児ドッジボール大会
3月 共通：鉄棒運動 5歳児：サッカー

3. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ・活動のために準備した素材や道具、環境の設定
- ・活動中の子供の姿・声、子供同士や教諭との関わり 等を記載ください。

【環境作り】

・子どもたちが思い切り体を動かせるよう、園庭やホールを活用し、平均台やケンケンパリングなど体幹が鍛えられる道具を用意した。また、遊びの時間にもドッジボールやリレーができるよう、園庭にコートやトラックのラインを引くなど、活動しやすい環境を整えた。

・正課指導以外の時間にも一人ひとりが目的をもって取り組めるよう『運動チャレンジカード』を作成し、段階的な難易度と明確な目標を設定した。

・iPadなどで活動の様子を写真・動画で記録し、大型スクリーンに映して振り返りができるようにすることで、子どもたちが自分や友だちの姿を客観的に見られる環境を整えた。

【子どもたちの取り組む姿】

・体操講師の話をよく聞き、動きを真似しながら挑戦する姿が見られた。友だちが手本を示すと、その動きを観察して取り組むなど、互いに学び合う様子も見られた。体幹を鍛える用具を用意したことで、楽しみながら体の使い方を身につける姿や、運動チャレンジカードの導入により、達成した項目に自分でシールを貼ることで達成感を味わい、縄跳び・鉄棒・雲梯などに継続して挑戦する姿が見られた。

・記録した映像や写真を見て、自分の動きを振り返り『どうやったらもっと上手くできるか』を考える姿があった。また、友だちの姿に対して「じょうず!」「どうやっているの?」「こうやるといいよ」など自然に声を掛け合い、互いにアドバイスし合う交流が生まれた。

・外遊びの中で、友だちが繰り返し挑戦する姿に刺激を受け、自分もやってみようとする姿があった。苦戦している友だちに対して、自ら手本となって教えるなど、主体的な関わりも見られた。(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、教諭との関わり等)

【保育者との関わり】

・走る様子を映した動画を見ながら、保育者が「走っているコースが遠回りになっているね」とコース取りに触れると、子どもたちからは「もっと線の近くを走ればいいんだ」という気づき生まれた。

・体育講師によるボールの投げ方の見本動画を提示し、保育者が「投げるときはどこを見ているかな」と問いかけたことで、子どもたちはフォームと投球結果の関係を理解し、自分の投げ方を改善しようとする姿が見られた。

・チャレンジカードに取り組む子どもに対しては、保育者が具体的な言葉で努力や工夫を認めることで、繰り返し挑戦しようとする意欲につながるよう配慮した。



4. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

言葉での説明だけでは動きの理解が難しかった子どもも、動画や写真を活用することで体の動かし方を視覚的に捉え、自ら動きを調整しようとする姿が見られた。友だちの発言を聞き、自分の課題に気付いて繰り返し挑戦するなど、学び合いの姿も育っていた。また、友だちが継続して取り組む様子や、クラス全体でチャレンジカードの達成状況を共有する場面が、苦手意識のある運動にも前向きに取り組もうとする意欲につながっていた。

子どもたちが明確な目標を持ち、段階的に取り組む姿を見守る中で、自分の力を把握したり、どの段階でつまづいているのかに気付こうとする様子を感じられた。また、様々な運動遊びを取り入れることで、多様な動きに挑戦したり、友だちと関わったりする機会が増え、「やってみたい」「どうしたらできるのだろう」と考えながら取り組む姿が多く見られるようになった。こうした経験の積み重ねが、子どもたちの継続力や意欲の高まりにつながっていることを実感した。

協力して取り組む運動遊びを重ねる中で、子どもたちは達成感を味わい、友だちと一緒に活動することへの意欲が高まってきた。その結果、集団での遊びが以前よりも活発になっている。特にドッジボールでは、子ども同士が自分たちでルールや役割を話し合い、保育者が介入しなくても遊びを進められる姿が増え、主体的に関わろうとする姿が見られた。多様な動きを楽しみながら達成感を積み重ねる経験が、次の挑戦への意欲につながり、継続的な活動を生み出していると感じている。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

幼稚園・学校番号	1241419
施設名（園名等）	帝京幼稚園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

感触遊びと色の発見

<テーマの設定理由>

「元気のもと遊びから」という園の方針のもと、子どもたちが「遊び」を通して自然に「気づき」や「学び」を得られるようなテーマを設定した。日常の保育活動の中で絵具を使用した際、子どもたちは絵具の感触に触れたり、色を混ぜることで新しい色が生まれることに興味を示した。こうした姿から、今回は「絵具遊び」や「色水遊び」など、色に関する遊びを中心に展開し、「色」の持つさまざまな特性や「色」と「感触」との関係性について、子どもたちの関心をさらに深めていきたいと考えている。

2. 活動スケジュール

- 1学期 手形、指スタンプ、絵具、スライム遊び、色水遊び
- 2学期 自然物からの色の発見、マーブリング、シャボン玉
- 3学期 自然物からの色の発見、小麦粉粘土、マーブリング

3. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ・活動のために準備した素材や道具、環境の設定
- ・活動中の子供の姿・声、子供同士や教諭との関わり 等を記載ください。

・子どもたちが素材に触れながら色や感触の変化に気づき、試したいことを自ら広げていけるよう、小麦粉粘土、スライム、色水、シャボン玉など、様々な素材を用意した。また、色に関する絵本を用意したことで、混ぜてみたい色や作りたい色を想像して色を選ぶ様子がみられた。

「スライムはベタベタだったのに、粘土はもちもちだね」や「紫を作りたいから赤と青を混ぜてみる」など、前回の経験や絵本の内容を思い出しながら素材の感触や混色を楽しむ姿があった。

・子どもがこねる、混ぜる、伸ばすなど、感触を楽しめる時間を十分に設けたことで素材に応じた多様な試行が生まれた。また、子どもたちは色の変化をじっと見つめたり、友だちと色を見せ合ったり交換したりする姿が見られた。「もちもち」「つるつる」「冷たい」「きれい」など、素材の特徴を言葉で表したり、変化に気づいた瞬間に表情が輝くなど、言葉、表情、動きに豊かに現れていた。

・友だちとスライムや小麦粉粘土を交換する環境を作ることで、気づきや驚きを友だちと共有しやすくし、「どうやってその色にしたの?」「○○ちゃんのは地球みたいだね」「赤色ちょっとちょうだい」等、対話や関わりが自然に広がったり、子どもたち同士で探求が生まれたりした。

・保育者は子どもの気づきや驚きを受け止めながら、「どうなっているかな」「何色ができたかな?」「ここだけ色が変わってきたね」などの言葉を添え、子ども自身が試し、結果を確かめられるように見守りを中心とした関わりを行った。

・活動中の言葉や表情を写真や文で記録したり、できた作品を飾ったりして後から振り返ることで、子どもが心を動かしたポイントや「またやってみたい」「次はこうしたい」という気持ちに繋げることができた。



4. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

初めての素材や感触に戸惑いを見せる子どもも、友だちが楽しそうに触れている姿や、素材が変化していく過程を間近で見ること、「やってみよう」と気持ちが動き、挑戦する姿が見られた。混色を進める中で色が濁っていくこともあったが、子どもたちにとってはそれも新しい発見となり、「ぞうさん色」「泥色」など、身近なイメージと結びつけて表現する姿があった。

このことから、混色遊びは“作りたい色を再現する”だけではなく、偶然生まれた色を楽しんだり、意味づけたりしながら探求が広がっていく活動であることに気付かされた。また、1学期のスライム遊びでは、友だちとのやりとりに保育者が入る場面が多かったが、3学期の小麦粉粘土遊びでは、保育者を介さずに「その色ちょうだい」と友だちに声をかけたり、混色の面白さやできた色の感動を友だち同士で伝え合ったりする姿が増えていた。

素材を交換し合う環境づくりや、子どもの気づきを受け止めながら見守る関わりを続けてきたことで、子ども同士の対話や共有が自然に広がり、遊びの中での関係性や探求の深まりが感じられた。